

〔書評〕

藤原与一著

『方言文末詞（文末助詞）の研究』（上・中・下）を読んで

鈴木英夫

本書の特色は、一言でいうと膨大な資料を駆使して書かれた膨大な書であるということである。夥しい資料をもとに、次から次へと説いて行かれるさまに、読む者は、驚嘆し茫然とするばかりである。見事であり、著者ならではの研究であり、書きぶりである。

本書は、『昭和日本語方言の総合的研究』の第三巻として刊行されたもので、上・中・下三巻となっているが、内容的には、上巻と中巻は一まとまりのものである。二巻三冊の書ということが出来る。

著者は、方言の研究においては、文末詞が重視されるべきであるとし、「文末助詞研究と敬語法研究」とは、私にあつて、まさに方言研究の車の両輪のようなもの（縮言）であると述べて居られる。既に刊行されている『方言敬語法の研究』『方言敬語法の研究 続篇』に続き、本書の刊行によって『昭和日本語方言の総合的研究』は完結したことになる。

「文末詞」という、聊か耳慣れないこの語を、著者は何故使おうとされるのであろうか。著者は、『日本語方言文法の研究』（昭和24年刊）では「文末助詞」と呼んで居られたのであるが、次第に「文末詞」という名称をよしとするようになってきたと言われる。それは、カ・ヨ・ネなどの「文末の特定の訴え成分」は、遊離性・孤立性が強く、

それ故に「辞」とは呼べず、「詞」と考えざるを得ない。とすれば、「文末辞」とか「文末助詞」とかいう名称は適切ではなく、あくまで「文末詞」と呼ぶべきであり、それを入子型にならつて図示すれば、

梅の花が咲いた

よ

のようになると考えられるのである。ただ、「遊離性・孤立性」をもとに「詞」と認定するのは橋本文法的であり、それを時枝文法の入子型で図示されようとするのは如何であろうか。

この「文末詞」について、まず序編「昭和日本語方言文末詞（文末助詞）研究 総論」において、その本質や機能などが論じられる。序編の構成は、以下の通りである。

第一章 文表現の訴え

第二章 文末の訴え成分

第三章 文末詞の分類

第四章 文末詞（↓特定文末部）の機能

第五章 「文末詞」化

第六章 文末詞の記述

このうち、第三章においては、さまざまな文末詞をどのように分類し整理して行くかが考察されているが、内容からの分類をすつきりしたものにするには、むずかしいだろうと考え、形式上の分類を重んじて行く立場をとることが明らかにされる。それによつて、「共時論的たちばと通時論的たちばとの融合を、じみちに實際化する」とが可能だと考えるのである。

この立場から文末詞は、まず大きく二つに分けられる。

原生的文末詞

転成(転生)文末詞

前者は、本来文末詞として成立したと考えられるものであり、後者は、他の品詞から転じて生まれた文末詞である。

本編「昭和日本語方言文末詞へ文末助詞」の総合的記述は、右の分類に基づいて構成されている。

すなわち、上・中巻の二冊は原生的文末詞の記述に当てられ、下巻で転成文末詞が取上げられる。

まず、「第一章 文末訴え音」では、文末詞とは言えないが、「文表現の文末にあらわれる、文末詞以前の」、いわば「音形」を取上げ、これを「文末訴え音」と呼んで記述する。たとえば

○ヤムヤム ト (1) グンツ。 (雑記)

三に三にこちよ。

という場合の、助動詞「べ」に付されている「ア」音が、ここでのいう文末訴え音なのである。こうした文末訴え音は、「訴えの効果を發揮し、よびかけの性格を示す」点において、通常の文末詞と同様であり、「やがて、感声的文末詞になつていく可能性」があるとすると

その文末訴え音としては、「ア音」のほか、「エ」「イ」「オ」「ン」などの音が見られるという。

第二章では、文末詞とすべきか否か幾分問題のある「ヲー(オー)」が取上げられる。「ヲー(オー)」は、「成形固定の通常態の文末詞として受けとらう」とすると、その「さけび」的な要素または訴え音らしいおもむきが問題視され、さりとてこれを、「さけび」的なもの、訴え音的なものとして受けとらう」とすると、そのつかわれさまの方言習慣のいちじるしさ、通常の文末詞同様の安定感を見せた使用ぶりが問題視される」からである。著者は、これを文末詞として扱い、記述する。

さて著者は、原生的文末詞を、

感声的文末詞

非感声的文末詞

に下位分類するが、第三章から第六章までが感声的文末詞であり、第七章が非感声的文末詞である。

第三章 ナ行音文末詞

第四章 ヤ行音文末詞

第五章 サ行音ザ行音文末詞

第六章 感声的文末詞「ダ」

第七章 「カ・カイ」文末詞

「カ」は、「現段階では感声的とも言いかねるので」「非感声的文末詞」として、「ナ」や「ゼ」などの「感声的文末詞」と区別するのである。

第六章の「ダ」は、助動詞「ダ」から転じた文末詞ではなく、四国・近畿にみられる

○ヤ川 ヲまぐびヤ、エー。(雑記)

(このひきの中)は)もみがあるんですよ。

といった場合のものをさす。

下巻では、転成文末詞が扱われている。

第八章 転成の文末詞

第九章 助詞系の転成文末詞

第十章 助動詞系の転成文末詞

第十一章 動詞系の転成文末詞

第十二章 形容詞系の転成文末詞

第十三章 形容動詞系の転成文末詞

第十四章 名詞系の転成文末詞

第十五章 代名詞系の転成文末詞

第十六章 副詞系の転成文末詞

第十七章 感動詞系(文系)の転成文末詞

助詞系の転成文末詞とは、「ノ」「ニ」「ト」「トイ」「タイ」「デ」「デワ」「ガ」などである。

助動詞系の転成文末詞としては、「ダ」「ジャ」「ヤ」「ナラ」「ゲナ」「ベ」「ケ」などが扱われている。ここで扱われている「ダ」は、前述の感声的文末詞の「ダ」ではなく、指定の助動詞出自とされるものである。

ズンデ シムツダ ダ。(新編下)

死んでしつたよ。

動詞系の転成文末詞とは、「テバ」「カシラ」「タラ」などである。「テバ」は「と言えば」、「タラ」は「と言ったら」に由来すると著者

は考えられる。その他、次に示す「トテ」は「と言って」に、「チャ」は「と言やあ」に相当するとみられる。

「トー」「トーダス」ナナ。(新編)

そうそう、そうですとも。

「ソレジャ」チャー。(風山源下)

それだよ！

「チャ」「チュ」「チ」「テ」「ツ」なども、「言う」に関する文末詞とみる。

「言う」以外では、「申す」に関するもの(モシ、「思う」に関するもの(トモエ、トモイ、トモインサイなど)、「見る」に関するもの(ミ、「トミー)、「御覧」に関するもの(ゴ、ゴンナ、ゴイナなど)、「ござる」から来たとされる「ゴイ」、「来い」に由来する「コイ」などが指摘されている。

形容詞系の転成文末詞は極めて少ない。『五戸の方言』に記載されている「マデナエ(言う迄もない)」「伯方島誌」の「キシヤレ(汚ない)などを挙げて居られる。

形容動詞系の転成文末詞としては、「イカナ」だけが考えられている。この「イカナ」は、「いかなのん気者でも」などと使う形容動詞に由来すると考えられる。

名詞系の転成文末詞の中心は「モノ」と「コト」であり、他に「ワケ」「クライ」「トコロ」が挙げられている。

代名詞系の転成文末詞のうち、まず事物代名詞系の文末詞としては、「コレ」と「ソレ」から生まれたものがあり、「コレ」の属としては「ケ(ー)」「カイ」「カ(ー)」などが、「ソレ」の属としては、

「ソ」「セー」などがあると考えると居られる。また、富山県下の「ナモ」は、「何も」に由来するのではないかとされる。

「ノー」モコトニス セナモ。

「ノー」も「言うどころじゃない言いますとも」。

人称代名詞(自称)系の文末詞としては、まず「ワイ」が挙げられる。「ワイ」は「ワシ」に相当するとされる。「バイ」も、柳田国男の「鴨と哉」(言語研究 第一号)にみられる、「バイ」も「ワイ」や「ワ」と共に「もう起源を意識しない『我は』であったかも知れぬ」という考えに賛成し、人称代名詞系の文末詞とされるのである。

「ワ」も、代名詞系の文末詞とする。この「ワ」は、近古の文献にみられる文末の「は」とは別ではないかというのが、著者の考えである。理由の一つは、「現代方言上での『ワ』文末詞は、関東地方の女性発言のばあいなど、総じて上がり調子に発音される」のに対し、「古文獻上の『は』終助詞は、むしろ下がり調子に発音されがちなものであったのではなからうか」と思われるとする。また、「ワ」の使用が、「ワイ」の使用に近いというのが、第二の理由である。『ワイ』は「ワー」にもなりうる。『ワー』からすぐの所に『ワ』がある」とされる。そして、各地で、「ワ」と「ワイ」が同じように使われていると指摘される。たとえば、著者は高山で一老女が

ネラー コンヤ ヌムコトモ トカン フト。

わしは今夜どこへも行かないよ。

ヒダ デス ワ。

飛騨ですわ。

と言うのを耳にされたという。

「オレ」の属としては、「オレ」「オラ」が指摘されている。

キヨー キチ キョーチチセー ムリダンン オレ (栃木県 黒羽町)

キョウ 沖ニ キョウといつても 辨曲なるう。

「レ」や「ラ」は、「ワレ」の属とされる。

ワナ ケチ ヨー カワナシダ フ (総攷)

キヤウキのワヤウニハナシヤト。

対称代名詞系の文末詞としては、まず「コンタ」「コナ」「オンシ」「キサマ」が挙げられる。また、自称代名詞系の「ワレ」とは別に、対称代名詞系の「ワレ」に由来する文末詞「ワレ」「レ」「ラ」などもあるとされる。

ンビ ヌヤクニヤフ。(総攷)

どうして知へんか知らないか。

「オマイ」の属には、「マイ」「ノマイ」などがみられるとする。「アナタ」の属としては、「アータ」「アタ」「アントク」「ナントク」などが挙げられている。また、「アナタ」に由来するとされる「タ」を含む「カイク」「タイク」「バイク」などにも言及されている。

副詞系の転成文末詞としては、「ホンニ」の属、「ハヤ」の属、「ハ一」「ハ一」の属、「モー」の属、「マツ」の属などが取上げられている。

接統詞系の転成文末詞はほとんどみられないが、「サラ」「二されば」

の転とみる)や「そして」にあたる「ホイテ」などが考えられるとす
る。

感動詞系の文末詞としては、まず、「モシ」を挙げる。これは「申
す」から出たとみる。「モシ」の略形が「シ」「モ」であり、複合形
に「ナモシ」「ノモシ」「ネモシ」などがあるとされる。

他に、「オイ」「ヨイ」「ホイ」「コラ」「ソラ」「ホラ」などについ
ての記述がなされている。

以上が本書の概要であるが、取上げられている用例は、著者自身
が集められたものの他、『全国方言資料(日本放送協会)』を初めとし
て、他の研究書や小説などから取られたものもある。それらの引用
文献は、一括して下巻の巻末に地域ごとにとまとめて掲示してある。

また、各巻の巻末には、方言事象索引と事項索引が付されている。

著者は、集積してある膨大なカードをもとに、各地の文末詞につ
いて網羅的に、淡々と記述して行く。出来るだけ多くの用例を挙げ、
各地の文末詞を洩れることなくすべて列挙しようとする著者の意気
込みが窺われる。

著者の記述の仕方はかなり独自のものです、普通の学術研究書とは
異なる面も多い。

たとえば、ことばについての感覚を大切になさり、「実感から言え
ば」といった言い方をなさるし、

私も、自己の生活語の「ワイ」から出発して、つとに、九州の
「バイ」に「ワイ」を感じてきた。(下402ページ。傍点筆者)

と述べたりなさる。

また、性急な結論をできるだけ避けるように努めて居られる。従
つて随所に

ここの「シ」が、また、「モシ」の「シ」としうるものなのかど
うか。(上、236ページ)

のような、断定を避けた言い方がなされている。事実を事実として
示そうとする態度で一貫されている。

時には相反する見解が、そのまま並記されることもある。たとえ
ば、長崎県内総体では、「ナ」はよいことばだとされている。とし
た直後に、「ところで、林田明氏は」「長崎市の「ナ」は必ずしも下
品とは言えないにしても『ぞんざいな』言い方の一語につきる。……
などと述べていられる」と続けてあり、そのくいちがいに
論ずることなく、すぐ五島列島内の「ナ」について言及するという
ふうに筆を進めて居られる。

つまり、文末詞についての問題を論じよう、とされるのではなく、
できるだけ多くの資料を提供することに重点が置かれているのであ
る。問題点やその説明は読者に委ねられているとも言えるし、著者
の結論を敢て明確に表明していないとも考えられる場合も多い。そ
うした点に不満を感じるか、よしとするかは、読者によって評価の
分かれる所であろう。

ところで、方言について全く素人である私如きが、本書の内容に
ついてあれこれ言及するのはおこがましいことであるが、素人とし
ての素朴な疑問を幾つか述べてみたい。

その一つは、ワイについてである。著者は中国地方の「クラー」
を「来るワイ」の融合形とみておられる。(下386ページ)。関東地
方の「イッテクラー」(行って来る)についても、ワイが陰在して
いるとされる。「くでサー」も「くですワイ」の転とみられる。こ
れらは「来るわ」「ですわ」の融合したものと解する方が自然なよう

に思われるが如何であろうか。

東京の女性の用いるワも、ワイに由来するとみられているが、ワは土地により、また男性語か女性語かといった違いにより、系統を異にすることもあるのではなからうか。ある語形が何に由来するかを決定するのは、むずかしい問題であると思われる。

表記には、ジとヂの両方が用いられているが、これも明確に摩擦音と破擦音に対応しているのかどうか疑問に思われる所もある。たとえば、天草のことばについて述べている箇所(下 44ページ)に、

「シランジャッター トー」(知らなかったのです)とある後に、「ヂャツ トン」(そうだ)とある。この「ジ」と「ヂ」とは、異なる音価を示すものであろうか。両方共断定の「ぢゃ」ではなからうか。

また、多くの方言集や方言研究書が利用されているが、現在の資料と、たとえば文政年間の『方言達用抄』(中 499ページ)とが、同じレベルで扱われているのは、如何なものであろうか。

また、私のような専門外の者には目慣れない語があつて、時々首をかき上げることもある。「桐生市での、小男間のことばである」(上 225ページ)、「全男」と「老女」とが(上 239ページ)、「連大限的」「連薩摩的」(下 89ページ)などは、方言研究者にとっては普通の物言いなのであろうか。

それにしても、膨大な資料が提示されているだけに、教えられる点が数多くある。

私は、以前拙稿「明治東京語の過渡的性格——「くだサ」という言い方をめぐって——」国語と国文学 昭和52年9月号)で、明治期には書生言葉として「当り前だサ」といった言い方があつたことを取上げ、それに関連して、石坂洋次郎の『若い人』に、「幸福だサ」という表現が

あつたのが、後に「幸福だよ」に改められたことを指摘した。これは、恐らく東北方言が作品に反映したのに気づいて、作者の石坂洋次郎が後に改めたものと考えていたが、本書(中巻)によって宮城や秋田に「ンダサー」という言い方があることを知って確認することができた。「くだサ」という言い方は、永井龍男の『狐』に登場する東北生れの老婆のことばにも、「そりや、子供は無邪気なもんださ」と出て来る。

江戸語で使われた「ナナ」(なさいな)の意)が、「早く来なな」のように、今でも佐久地方で使われていることも、興味深い事実である。

私ども茨城県人が使う「ホントケー」(ほんとかい?)「ソーケー」(そうですか)などを、山口県下でも使うということを知って、素朴な驚きを感じたりもした。

私のような素人と違って、本書は方言研究者の方々には、より以上に利用価値があるであろう。丁度、湯沢幸吉郎氏の『徳川時代言語の研究』や「江戸言葉の研究」などが、近世語の研究を大きく発展させたように、本書も方言研究の進展に大きく寄与することと思われる。

また、若い方言研究者が本書を播くことによつて、著者の、方言研究に寄せる並々な情熱と意欲とを行間から読み取り、方言研究への一層の励みを受けるのではないかと思われる。

これだけの大冊でありながら、私には誤植が見当らなかつた。これも、著者の本書への思い入れの表われであらう。

私が、方言には全くの門外漢でありながら、おこがましくも書評をお引き受けしたのは、一つには、前述のように著者が文末助詞研

究と敬語法研究とを方言研究の車の両輪としてみておられることに共鳴したためである。文末助詞を、待遇表現との関連で捉えることが国語学における今後の課題の一つではないかと私自身考えているからである。

もう一つの理由は、私が以前、終助詞（著者の言われる文末詞）について論じたことがあるからである（『現代日本語における終助詞のはたらきとその相互承接について』国語と国文学 昭和51年11月号）。文末助詞の相互承接についても本書には多くの記述があり、私自身大いに学恩を蒙っているが、それは私個人の問題なので立ち入らなかつた。

これほどの大著に、門外漢の私が挑むことは正に螻蛄の斧の譬えの通りであり、恐らく見当違いの受け取り方をしている点が多いかと思う。また、浅学の身で批評がましいことを幾分なりとも申上げた非礼もお許し頂きたい。

（上）昭和五十七年一月二十五日発行 六三七頁 八三〇〇円、中
昭和六十年五月二十日発行 五三九頁 八〇〇〇円、下 昭和六十
一年九月二十五日発行 六九五頁 一一〇〇〇円 A5判 春陽堂
書店）

——茨城大学教授——

（昭和六十二年十二月十五日 受理）